

## 『雷塘庵主弟子記』 訳注（2）

村 上 正 和  
豊 岡 康 史  
相 原 佳 之  
柳 静 我  
李 侑 儒

本稿は、阮元（1764–1849）の年譜である張鑑等撰『雷塘庵主弟子記』の翻訳である。

前稿でも記したように、阮元は有能な政治家として乾隆帝・嘉慶帝・道光帝に仕え、特に嘉慶四年（1799）に署浙江巡撫に任命された後、両広総督、雲貴総督を歴任するなど嘉慶・道光年間の清朝の地方統治を支えてきた人物である。その年譜である『雷塘庵主弟子記』を用いて地方大官としての生涯をたどることで、様々な地方統治の課題に長期にわたって取り組んでいた清代の地方大官の活動を具体的に把握し、統治の仕組みが大きくゆらいでいたこの時期の清朝統治のあり方への理解を深めていくことが翻訳の目的である。

前稿である「『雷塘庵主弟子記』 訳注（1）」（『環日本海研究年報』第28号、2023年）では、阮元が二十歳になるまでを翻訳した。本稿ではそれに続き、二十一歳から三十歳になるまでを翻訳する。本稿で取り上げる十年の間に阮元は進士に合格し、政治家としての一步を踏み出す。さらに乾隆帝からの高い評価を得たという逸話も記される。

翻訳するにあたり、本稿では東洋文庫所蔵の道光年間儀徵阮氏琅嬛僊館刊本を底本とした<sup>1</sup>。

【 】は『雷塘庵主弟子記』に記された双行夾注であり、（ ）は訳者らによる補足である。

### 『雷塘庵主弟子記』 卷一

四十九年甲辰（1784）、二十一歳。

謝墉が江蘇学政となり、（阮元は）歳試で儀徵県学の第四名となった。

五十年乙巳（1785）、二十二歳。

科試で一等第一名となり、廩膳生となった。経書の問題と策問ではあますところなく解答し、文章もまた最も素晴らしいものであった。謝墉は「私は以前、江蘇学政の任期中に汪中を得たが、今回は阮某を得た」と驚き賞賛し、翌年に江陰を訪れ、学政の執務所にとどめることを約束した。

五十一年丙午（1786）、二十三歳。

正月、江陰に到着した。

二月、謝墉に随って鎮江・金壇で試験を行い、答案の評価をした。

三月、江陰に戻った。

五月、揚州に戻り、また江陰に到着した。

閏七月、江寧で残っていた答案を評価した。

八月初三日、出張に出た。

八月十六日、試験が終わった。

八月十七日、燕子磯で風に阻まれたので永濟寺に遊び、洞壑を尽く見物した。十九日に揚州に到着した。

九月初九日、合格者の発表があり、第八名で合格した。この時に試験を主催したのは大興の礼部侍郎朱珪であり、副考官は大庾の編修戴心亨、房考官は蕪湖同知で、烏程の孫梅であった。この試験で朱珪は「過位」（論語・郷党編）二節を出題し、江永『郷党図考』を用いて評価したので、非常に多くの人材を得ることができた<sup>2</sup>。

十月二十日、謝墉が任を終えて帰京することになり、会試受験のためにその一行として上京した。

十一月十九日、京師に到着し、前門内の西城根に滞在したところ、余姚の邵晋涵、高郵の王念孫、興化の任大椿の三先生と知り合った<sup>3</sup>。

五十二年丁未（1787）、二十四歳。

会試は不合格となり、京師に留まることにした。夏に娘の荃が生まれた。「考工記車制図解」を完成させた。

五十三年戊申（1788）、二十五歳。

「考工記車制図解」を印刷した<sup>4</sup>。

五十四年己酉（1789）、二十六歳。

会試に第二十八名で合格した。この時の正考官は、経筵講官・東閣大学士にして礼部尚書を兼任する韓城の王杰、（副考官は）署経筵講官・礼部右侍郎である満洲人の鉄保、文淵閣直閣事・工部右侍郎である陽湖の管幹珍、同考官は吏部文選司主事である鳳台の関遐年であった。

四月、円明園で覆試が行われ、一等第十名を得た。殿試では二甲第三名となって進士出身を賜った。朝考は第九名であった。引見した後、翰林院庶吉士となった。当時、翰林院掌院学士であった錫山の嵇璜は、上奏して先生を満文を学ぶ組に入れたが、それは先生が江蘇出身の翰林院庶吉士の中で最年少であったからである。後に命令を受けて、満文を学ぶ人数が

多いので、特別に漢文を学ぶことになった。大学士の和珅、吏部尚書の彭元瑞が庶吉士の大教習に命じられた。ついで『万寿盛典』の纂修官、国史館・武英殿の纂修官に任命された。

冬十二月、散館試が近づいたので、庶常館に泊まり込んで勉強した。

五十五年庚戌(1790)、二十七歳。

万寿の恩典により、阮承信は儒林郎・翰林院庶吉士に勅命で封じられ、林太夫人は安人を贈られ、先生の伯父である阮承義は儒林郎・翰林院庶吉士を、伯母の江氏は孺人を贈られた。

四月、散館試があった。【御試一日羅賦<sup>5</sup>】により一等第一名となり、翰林院編修を授けられた。外城の揚州会館に移った。

秋、親に会うために暇を請おうとしたが、翰林院掌院学士・武英殿大学士の阿桂は大考が近く、試験を避けていることになってしまうのを恐れて認めず、あわせて「私は阮元が学問を修めており、試験を避けているのではないことはもとより知っている。しかしもし彼だけを許して、他の者が次々に暇を願い出てきたなら、私はどのように応じればよいのか」と言った。

八月、乾隆帝の八十歳の万寿節があり、「宗經徵寿説<sup>6</sup>」を進呈した。乾隆帝が御覧になり、選ばれて特別に大緞一疋を賞賜された。

五十六年辛亥(1791)、二十八歳。

(阮元は)もともと乾隆五十五年散館試で第一名になり、また文冊を進呈して恩賞を受け取っていた。大考が近づくと、南書房で人を必要としていたので、先生が高く評価されるはずだと噂が広がった。そのため暇を願ってこれを避けようとしたのである。

暇乞いが認められず、先生は韓城の東閣大学士、王杰の勧めに従って内城に移り住むことにした。諸城の翰林院檢討、劉鏞之の家に仮住まいして、ともに読書し、門を閉ざして留まること数ヶ月に及んだ。(阮元は)自ら字体を変えて、答案を人が読んでも自分だと悟られないようにした。試験答案の解答者がわかってから、(試験官は)第二名と評価した者を知った、というのがこれである。

二月初十日、円明園で翰林院・詹事府官員への大考が行われ、張衡「天象賦」に擬する、劉向「請封陳湯甘延寿疏」に擬してさらに今日との異同を述べる、眼鏡を題材とした詩を賦することが命じられた。答案をみた大官は、先生の賦が博雅であると思ったが、賦中の「崆」字の音がわからず、三等に置いた。その後で字典を調べて、一等としたのである。封巻して御覧に進呈したところ、翌日に「第二名の阮元は第一名よりも優れており、劉向「請封陳湯甘延寿疏」に擬した文章はさらによい。古文に秀でた者である」とのお言葉をいただいた<sup>7</sup>。(乾隆帝は)自ら、先生を一等第一名に改めた。

(二月)十三日、詹事府少詹事への昇任が命じられ、ついで南書房での勤務と、内務府の書画を編集して『石渠宝笈』(続編)とすることが命じられた。

(二月)十四日、謝恩の意を伝えると、勤政殿の東暖閣に召し出され、「品格を保ち、軽挙妄動を慎むように」と命じられた。翌日、乾隆帝は軍機大臣を召見し、阿桂に「阮元は聡明で誠実であり、福相があるように見える。朕は八十歳になるまで長命であったばかりか、さらにひとり人材を得られるとは思わなかった」と話した。

(二月)十五日、日講起居注官に任じられた。

(二月)十八日、紫禁城に入り、南書房での務めに当たった。

五月、端午の日に黄繡扇囊を三、高麗布手巾を一、袖手帕を二、繡紗宮扇を一賜った。夏至の二日前、乾清宮の西暖閣に召し出され、書画、天文学と数学についての質問を受けた。その際、「汝の父母は何歳になるか?」と下問を受けた。先生は「私には、今年五十八歳になる父がいるのみです」と答えた。乾隆帝は「まだ若いな」と答えた。この日、御園から紫禁城に戻ると、羽扇、香葛を賜った。阮承信は江夫人と孫娘の荃を連れて上京した。

十月、阮承信は揚州に戻った。(阮元は)詹事府の詹事を授けられ、さらに文淵閣の直閣事にも任命された。【文淵閣には、当初四庫全書が完成した時に官職が置かれ、朱珪が最初の直閣事となり、皇十一子(永理)が自ら石印を刻して朱珪に贈った。今回、朱珪はその石印を先生に渡したのであった。】貂裘を一、『旧五代史』四套、『欽定蘭州紀略』一函を賜った。

十一月、詔によって石経の校勘官に任命され、先生は『儀礼』の校訂を担当した<sup>8</sup>。那彦成は『爾雅』の石経を、彭元瑞は『詩経』の石経の校勘の補佐を先生に依頼し、先生は多くの点を議論し、指摘した。

五十七年壬子(1792)、二十九歳。

正月、重華宮の聯句で、紫光閣の詩に和した。端研を一面、三清磁碗を五器賜った。

冬十月、娘の荃が天然痘のために亡くなった。江夫人も病となった。

十一月二十二日、江夫人が病のため亡くなった。

十二月二十七日、「福」字を賜った。

五十八年癸丑(1793)、三十歳。

正月、茶宴にて御筆の詩が書き加えられた杜瓊『溪山雪景』、及び端研、茶甌などを賜った。

三月、阮承信が揚州から京師に到着した。

五月二十八日、阮承信は京師から湖北の武昌に赴いた。

六月、『石渠宝笈』が完成した。前後して趙孟頫『無量寿仏』、元人『戲嬰図』、宋人『貨郎図』、蔣廷錫『墨牡丹』、惲寿平の画冊、董其昌の尺牘冊など七点を賜った。

(六月)二十五日、山東学政を命じられ、熱河に赴くと依清曠で召見された。

七月十五日、京師を出た。

(七月)二十三日、済南に到着し、すぐに済南府で試験を実施した。

(七月)二十四日、江夫人の棺が通州から揚州に戻り、揚州府城に入って葬儀を執り行った。

阮承信は族子の阮常生<sup>9</sup>に（阮元の養子として）喪に服するよう命じた。

八月十二日、『御製兵部奏凱旋兵丁至京由駅各帰本地營伍紀事』の墨刻、「福康安等奏西藏善後事宜詩誌顛末得四十韻」の墨刻、あわせて二巻を賜った。山東の新進の文武生員に陋規があったので、全て廃止した。

九月二十四日、兗州、曲阜、済寧州、沂州の試験に出発した。

十一月の上丁の日に孔子廟の主祭を担当した。曲阜の旧例では年に四度の祭祀を行う。学政は巡察に訪れた時、上丁の日であれば、みな自ら祭祀を取り仕切り、衍聖公はそれを補佐することになっている。この時は衍聖公の孔憲培が亡くなったばかりであり、先生は試験が終わっていたので、祭祀の主祭を代わったのである。

十二月、済南に戻った。阮承信が家属を連れて、既に十三日より前に到着していた。阮承信は側室として劉氏を迎えるよう（阮元に）命じた。

- 
- 1 黄愛平『阮元年譜』（中華書局、1995年）、王章涛『阮元年譜』（黄山書社、2003年）、ならびに阮元『學經室集』（中華書局、1993年）も適宜参照している。
  - 2 この試験については水上雅晴「清代學術と科擧 乾嘉期における学風の変化と受験生の対策」（『琉球大学教育学部紀要』第79集、2011年）に詳しい。
  - 3 双行夾注で、阮元「南江邵氏遺書序」（『學經室二集』卷七）、「任子田侍御弁服釋例序」（『學經室一集』卷十一）を引用する。
  - 4 双行夾注で「考工記車制図解下」（『學經室一集』卷七）を引用する。
  - 5 『學經室四集』卷一。
  - 6 『學經室二集』卷一。
  - 7 双行夾注により「御試擬劉向請封甘延寿陳湯疏并陳今日同不同」（『學經室二集』卷一）を引用し、阮元による回想を補足する。なお『學經室集』には、「御試擬張衡天象賦」（『學經室四集』卷一）、「御試賦得眼鏡」（『學經室四集』詩卷一）を収録する。
  - 8 双行夾注により、「儀礼石經校勘記序」（『學經室一集』卷二）を引用する。
  - 9 阮常生（?-1833）。道光年間に戸部主事、直隸永平府知府、直隸保定府知府などを務め、署直隸按察使となった。

本稿はJSPS科研費22H00701の成果である。